

# 令和5年度自己点検評価報告書

令和6年3月29日  
自己点検評価委員会

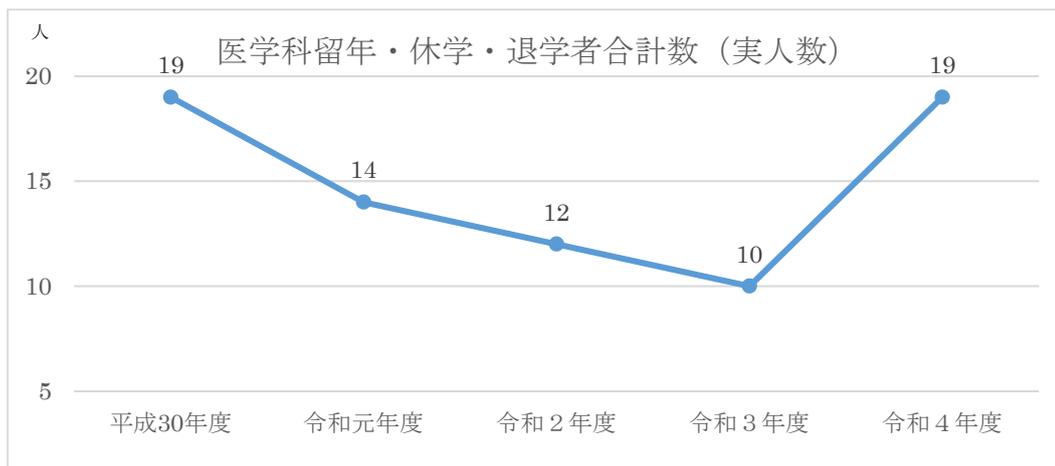
この報告書は、令和5年度における教育の質保証に係る自己点検評価等の結果についてとりまとめたものである。

## 1. 医学部の状況

### 1-1. 医学部医学科の状況

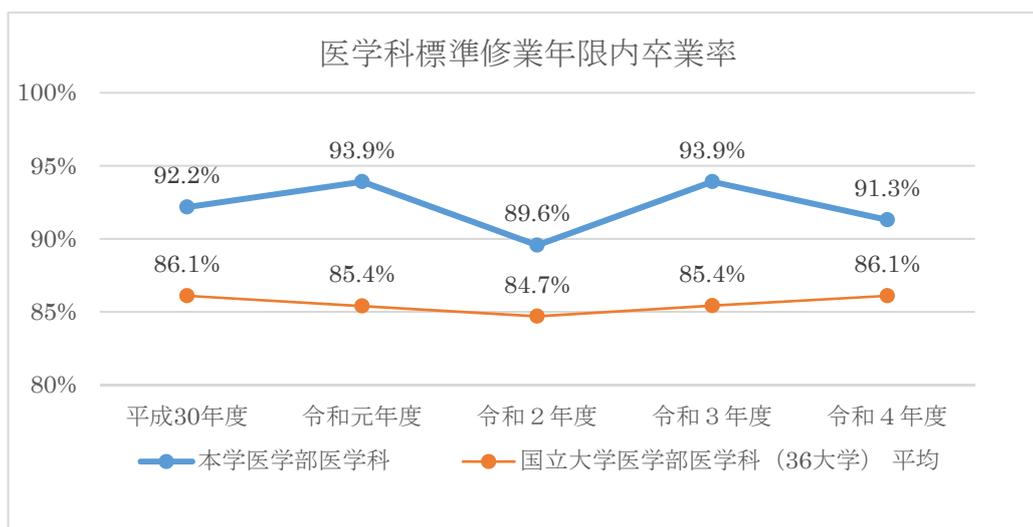
#### (1) 留年・休学・退学者数について

令和4年度の留年・休学・退学者の全学年での合計（実人数）は、19人であり、近年減少傾向であったが大幅に増加した。



#### (2) 標準修業年限内卒業率について<sup>1</sup>

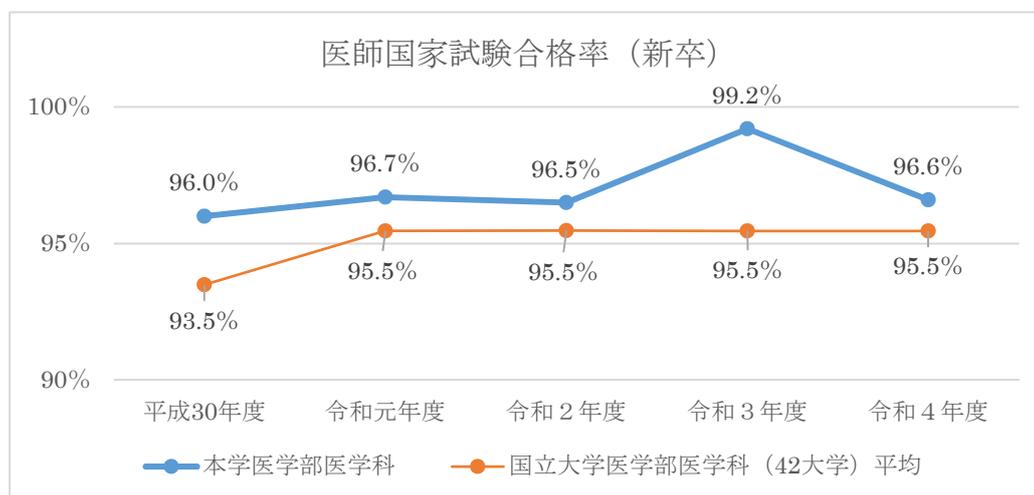
令和4年度卒業生の標準修業年限内卒業率は、91.3%（国立大学医学部医学科36大学中11位）となっており、良好な水準を維持している。



<sup>1</sup> 大学改革支援・学位授与機構「大学基本情報」(<https://portal.niad.ac.jp/ptrt/table.html>) を元に本学で作成した。なお、国立大学医学部医学科は42大学あるが、欠損値のあった大学は除いている。なお、欠損値のあった大学は、年度により異なることから国立大学医学部医学科（36大学）平均については、昨年度の本報告書と若干異なっている年度がある。

### (3) 国家試験（医師）の状況について

医師国家試験の状況については、令和4年度の新卒では、合格率96.6%（国立大学医学部医学科42大学中16位）となっており、良好な水準を維持している。



### (4) コンピテンシー（学修到達目標）について

コンピテンシー（学修到達目標）について、例年どおり令和5年度の6年生について自己評価アンケートを実施した（有効回答率100%）。「豊かな人間性と高い倫理観」において「患者のプライバシーに配慮できる」及び「患者情報の守秘義務と患者等への情報提供の重要性を理解し、適切な取扱いができる」の項目で「よく身につけられた」及び「満足している」と回答した割合は、平成29年度の調査開始以来、過去最高を記録した。また、「社会貢献力」においても「地域医療の役割、必要性を説明できる」及び「地域医療で活躍できる資質を身につけている」の項目で「よく身につけられた」及び「満足している」と回答した割合は、平成29年度の調査開始以来、過去最高を記録した。これは、令和元年度から開始した総合診療・家庭医療実習の効果が継続しているものと思われる。一方、「国際社会に貢献するための語学力を身につけている」の項目で「よく身につけられた」及び「満足している」と回答した割合は、低迷を続けている。自由記述においても「英語力が向上できるとよかった」などの意見が少なからず見受けられた。今年度も授業科目「国際サービス・ラーニング」（1単位）を「国際サービス・ラーニングⅠ」及び「国際サービス・ラーニングⅡ」（各1単位）に拡充を行ったり、医学英語の基礎を学修する「医学英語Ⅰ」及び「医学英語Ⅱ」を新たに開講するなど教育課程を改善し、学生の語学力向上に努めている。

### (5) 入学生・卒業生アンケートについて

令和5年度入学生について、例年どおり志望動機やWebオープンキャンパスの参加理由等について確認するアンケートを実施した。回答内容を分析することにより、今後の入学試験の改善及び入試広報の参考としている。

卒業生アンケートについては、昨年度から同窓会の協力を得て実施してい

る。アンケート用紙の見直しや返信用封筒を同封するなど、工夫をおこない昨年度より回答率は、若干向上した（有効回答率9.7%）。回答は少数であったが、本学で受けた教育プログラムの満足度について設問したところ「満足」又は「まあ満足」と回答した者の割合は、100%であり、また、就労状況についても、ほとんどが大学教員（研究者）又は病院等の勤務医として勤務しており、良好な状況であった。

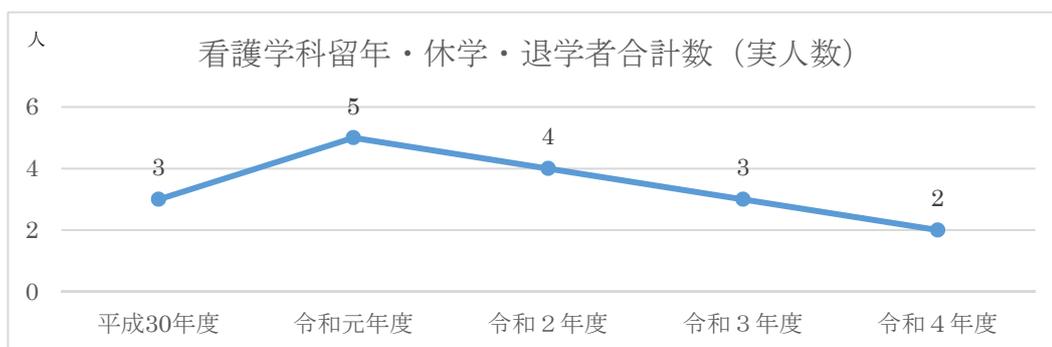
#### (6) 委員会による自己点検・評価の状況

医学科カリキュラム評価委員会及び入試委員会において、それぞれカリキュラムや入学試験の実施状況等について自己点検・評価を行った。

### 1－2．医学部看護学科の状況

#### (1) 留年・休学・退学者数について

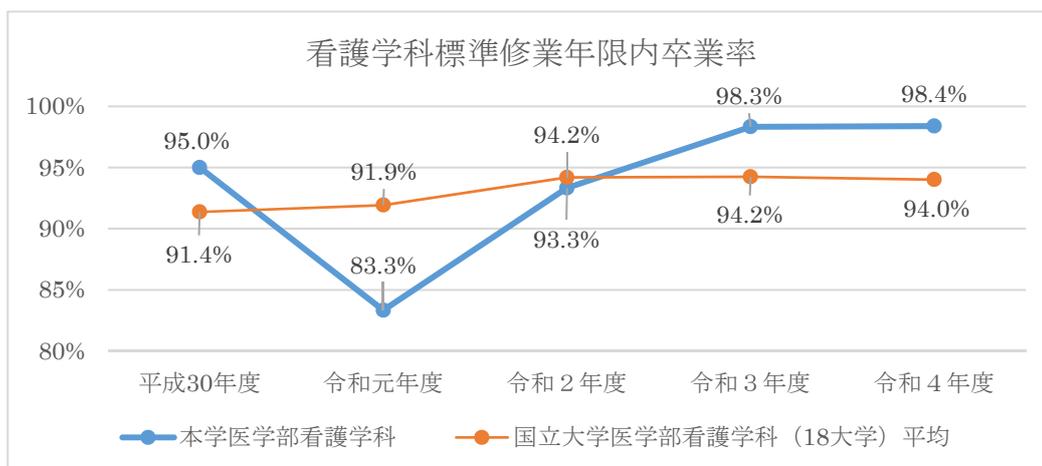
令和4年度の留年・休学・退学者の全学年での合計（実人数）は、2人であり、近年減少傾向となっている。



#### (2) 標準修業年限内卒業率について<sup>2</sup>

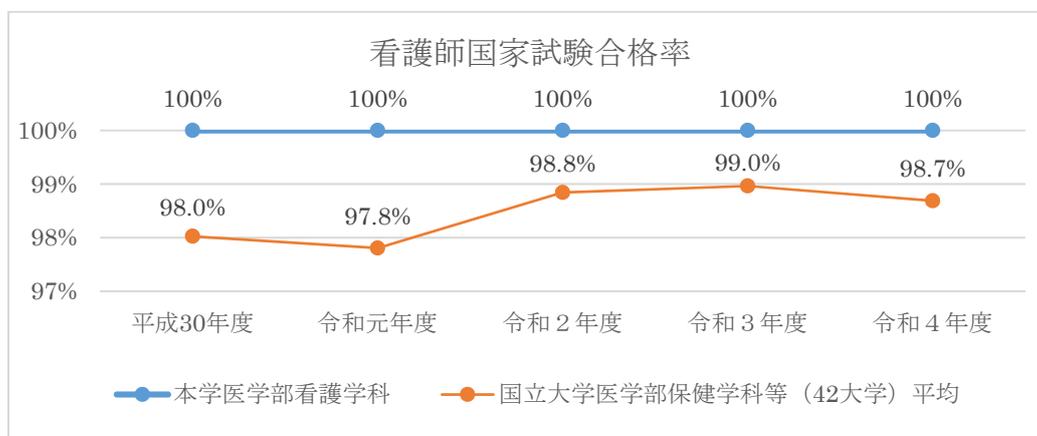
標準修業年限内卒業率については、近年他の国立大学と比較すると若干低迷した年度もあったが、令和4年度卒業生については、98.4%（国立大学医学部看護学科18大学中1位）となり優れた状況であった。

<sup>2</sup> 大学改革支援・学位授与機構「大学基本情報」（<https://portal.niad.ac.jp/ptrt/table.html>）を元に本学で作成した。なお、看護系養成課程以外のコースも持つ保健学科等は除いている。

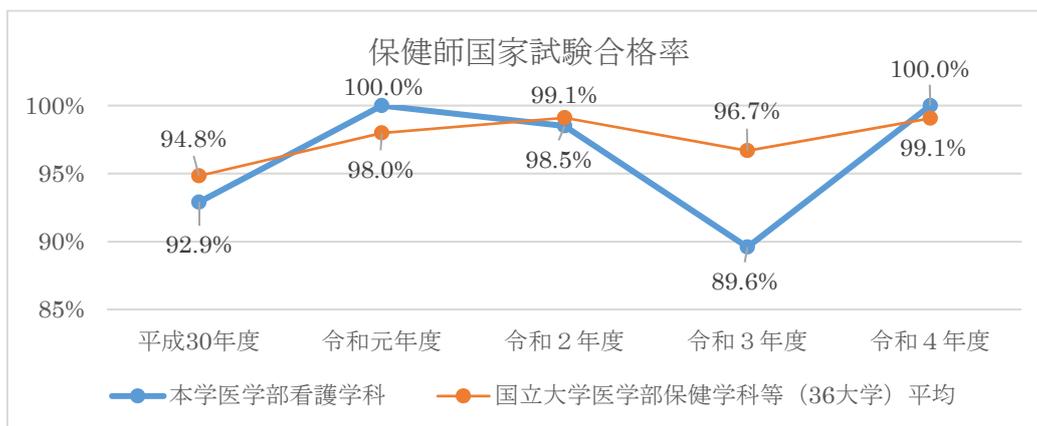


### (3) 国家試験（看護師・保健師）の状況について

看護師国家試験の状況については、令和4年度も合格率100%を維持している。ちなみに、本学は、6年連続合格率100%であり、6年連続100%は国立大学の中でも本学を含めて2校のみである。また、保健師国家試験<sup>3</sup>の状況については、令和3年度は低い状況にあったが、令和4年度は100%と回復した。



<sup>3</sup> 国立大学医学部保健学科等は、42大学あるが保健師養成課程が大学院にある大学を除いて保健師国家試験合格率の統計資料を作成している。



#### (4) 卒業時の学修成果について

ディプロマ・ポリシーに定める学修成果が獲得できているかどうか、令和5年度の4年生について自己評価アンケートを実施した（有効回答率38.8%）。ディプロマ・ポリシーの各項目について「かなり身につけている」又は「よく身につけている」と回答した割合は、全て60%を超えていた。また、本学科の教育満足度を5段階尺度（5点〔満足〕、4点〔ほぼ満足〕、3点〔普通〕、2点〔やや不満〕、1点〔不満足〕）で尋ねたところ、評価の平均値は4.19であった。

#### (5) 入学生・卒業生アンケートについて

令和5年度入学生について、例年どおり志望動機やWebオープンキャンパスの参加理由等について確認するアンケートを実施した。回答内容を分析することにより、今後の入学試験の改善及び入試広報の参考としている。

令和元年度卒業生について、同窓会の協力を得てアンケートを実施した（有効回答率54%）。今年度は、アンケート用紙の見直しや返信用封筒を同封するなど、工夫をおこない昨年度より回答率が大幅に上昇した。本学で受けた教育プログラムの満足度について設問したところ「満足」又は「まあ満足」と回答した者の割合は、100%であった。また、就労状況についても、ほとんどが、医療職として病院、保健所等の常勤職員として勤務しており、良好な状況であった。

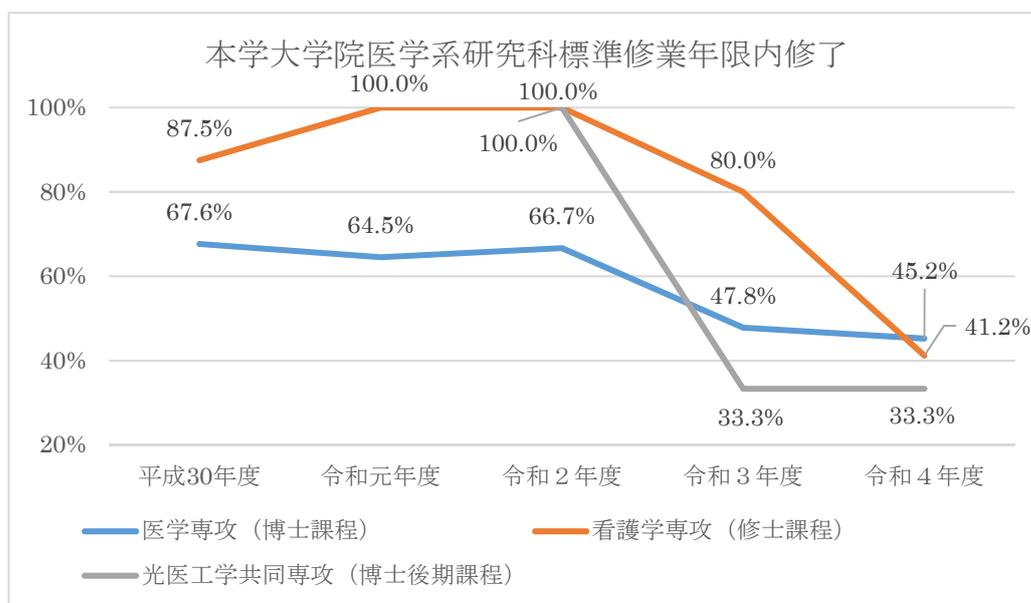
#### (6) 委員会による自己点検・評価の状況

看護学科カリキュラム評価委員会及び入試委員会において、それぞれカリキュラムや入学試験の実施状況等について自己点検・評価を行った。

## 2. 大学院医学系研究科の状況

### (1) 標準修業年限内修了率について<sup>4</sup>

大学院医学系研究科の標準修業年限内修了率は、以下のとおりであった。令和3年度及び令和4年度は、低下しているが、長期履修学生<sup>5</sup>が修了すれば、例年並みの水準となるものと思われる。

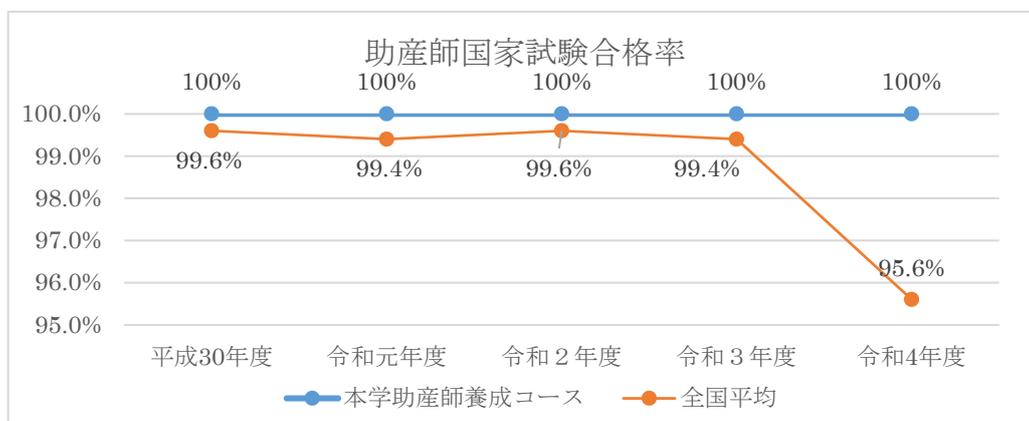


<sup>4</sup>文部科学省の「成果を中心とする実績状況」の調査の定義に準じて算出している。また、光医工学共同専攻（博士後期課程）は、平成30年度新設のため、令和2年度に初めて修了生を輩出している。

<sup>5</sup>職業を有している等の理由により、標準修業年限を越えて一定期間にわたり計画的に教育課程を履修し、修了することを希望し、その計画的履修を認められた学生

## (2) 国家試験（助産師）の状況について

令和4年度の大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）助産師養成コース修了生の助産師国家試験の状況については、平成27年度の本コース開設以来、合格率100%を維持している。



## (3) 大学機関別認証評価で指摘された改善を要する点について

令和3年度に受審した大学機関別認証評価において指摘された大学院医学系研究科医学専攻（博士課程）の入学定員の超過については、大学院医学専攻部会において、引き続き今後の対応を検討している。

## (4) 修了生アンケートについて

修了生アンケートについては、昨年度から同窓会の協力を得て実施している（看護学専攻（修士課程）：有効回答率57%、医学専攻（博士課程）：有効回答率21%）。看護学専攻（修士課程）へのアンケートについては、本学で受けた教育プログラムの満足度について設問したところ「満足」又は「まあ満足」と回答した者の割合は、87.5%であった。また、就労状況についても、ほとんどが大学・専門学学校の教員（研究者）又は一般病院・保健所等で勤務しており、良好な状況であった。

医学専攻（博士課程）へのアンケートについては、本学で受けた教育プログラムの満足度について設問したところ「満足」又は「まあ満足」と回答した者の割合は、100%であった。また、就労状況についても、ほとんどが大学教員（研究者）又は病院等の勤務医として勤務しており、良好な状況であった。